

【ポスター発表】

知的障がい者と健常者の初対面時におけるエスノグラフィーの分析

○ 所属なし 工藤 瑞香 (8553)

打浪 文子 (淑徳短期大学・7714)、大塚 裕子 (公立はこだて未来大学・8554)

キーワード：知的障がい者 コミュニケーション エスノグラフィー

1. 研究目的

21世紀は、人権の世紀と言われている。我が国の法務省でも、平成24年度の活動重点目標に人権擁護を掲げている。さらに、近年ではノーマライゼーションやソーシャル・インクルージョンの考え方も広まりつつある。しかしながら、障がい者を取り巻く現状は依然として厳しいままとと言える。

今日までに、情報技術開発による障がい者のコミュニケーション支援の研究は数多く行われている。しかしながら、情報技術開発は障がいの程度や種類によりニーズが異なるため容易ではない。特に、自己選択、自己決定、自立的な行動が困難である知的障がい者は、情報技術によるコミュニケーション支援が最も困難とされている[山内 2006]。

障がい者の社会参加のためには、情報技術開発によるコミュニケーション支援だけではなく、健常者が障がいに対して知識を得る仕組みがあることや、両者の交流の機会があるなどの環境が重要であり、そのような環境づくりを含めた支援が必要であると考え。また、環境づくりを含めた支援の実現のためには、とりわけ障がいを有する人との接点がこれまでに無い健常者と障がい者のコミュニケーションの実態を把握することが重要であると考え。

そこで、本研究は、情報技術開発による支援が最も困難とされている知的障がい者に着目し、知的障がい者と健常者の初対面時の対話場面の様相を把握し、コミュニケーションの成立の過程及びそのための条件を考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

質的研究方法の1つであるエスノグラフィーの手法を用いて、知的障がい者と健常者の実際の初対面時における対話場면을参与観察・記録・分析した。参与観察記録は、知的障害者更生施設（入所）Aで行われた施設利用者とその親族、ボランティアが参加可能である施設内の行事での筆者を含むボランティア2名（以下X, Y）と知的障がい者1名（以下Z）の3名の対話場面（1時間20分程度）を記録したものである。なお、Xはボランティア初体験であり、Yはボランティア経験者で筆者であった。

3. 倫理的配慮

施設側に研究の主旨について説明を行った上で、了解と許可を得てボランティア場面への参与観察を実施し、エスノグラフィーに基づく参与観察記録を作成した。また、記録に登場する施設名、人物名については本学会の研究倫理指針に基づき匿名で表記する。

4. 研究結果

分析のために、参与観察記録から発話及び行動のみを残し、対話内容や話者の関係性及び態度に変化が見られる場面ごとに区切り対話場面を設定した。その結果、116の発話及び行動、25の対話場面を設定することができた。対話場面は大きく3つの状態に分けることができる。記録を開始した当初、ボランティアXと施設利用者Zの対話はほとんど行われておらず、ボランティアYと施設利用者Zの対話、ボランティアXとYの対話を中心に行われていた。記録開始から20分経つと、ボランティアXと施設利用者Zの対話が積極的に行われるようになった。記録開始からおよそ40分以降では、ボランティアXと施設利用者Zの対話が積極的に行われているだけでなく、40分以前にはほとんど行われていなかったX、Y、Zの3人での対話場面が中心となっていた。記録開始から終了までのボランティアXと施設利用者Zの対話数に着目すると増加していることがわかった。

5. 考察

参与観察記録より2つのことが言える。まず1つ目についてである。Xは知的障がい者と初対面であり、知的障がいの者の実態を「知らない」状態にある。しかし、ボランティア体験を通し知的障がいの者の実態を「知る」ことにより、XのZに対する態度に変化が起き、対話数が増加したと考える。つまり、知的障がいの者の実態を「知らない」者が実態を「知る」ことに意味があるということが言える。2つ目は、「環境」があれば初対面であり、かつ知的障がいについての知識が無くてもコミュニケーションを成立させることが可能ということである。ここでの「環境」とは、ボランティアという知的障がい者との交流の機会があり、知的障がいの者の実態を「知る」ことができる状況、さらにはYのようなコミュニケーション媒介者が存在し、交流が促されるような状況にあることを示す。つまり、知的障がい者との交流の機会、そして交流することにより知識を得ることができる「環境」により、コミュニケーションが成立した。この結果から前述した環境づくりを含めた支援の重要性を示すことができた。

参考文献

- [1]山内繁,障害者の安全で快適な生活の支援技術の開発,国立障害者リハビリテーションセンター研究所,2006,URL:<http://www.rehab.go.jp/ri/safety/index.html>